
Dead or Alive

蹴球少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dead or Alive

【Nコード】

N0421F

【作者名】

蹴球少年

【あらすじ】

ある日トラックに轢かれた男。生死の狭間で彼は不思議な体験をする。目の前にいた女の子には羽が生えていて・・・

目の前が真っ白になった。別にRPGでゲームオーバーになったわけではなく、カーテンに包まったわけでもない。あれは多分ライトだ。耳が痛くなるほどのクラクションを鳴らして、それは走ってきただ。運転席で焦っている男がいて、俺はそれを滑稽だと思った。そんな変な顔をしてどうしたいんだろう？やけに時間の進みが遅く感じる。でも時間が止まったわけではなかった。目の前が光でいっぱいになると、それは俺を撥ね飛ばした。

俺は痛みを感じることもなく、ただ目をつむった。

「それで、いくつか訊きたいことがあるんだけど、いいか？」

俺はありえない状況にいた。それでも驚くほど落ち着いているのはなぜだろう？

「どうぞ」

目も前の女の子っぽいやつは笑顔で答えた。見た感じでは高校生くらいに見える。小さくて丸っこい顔に、肩の辺りまで伸びた髪、ぷっくりとした唇に俺と同じ形をした手足。どう見ても人だと思う。でも、ただ一つ違うのは背中の白いものだ。それをパタパタと振ってそいつはふわふわと浮いている。俺の記憶では漫画の中にしか登場しないはずなんだが。

「じゃあまず一つ、何で浮いてんの？鳥の類？」

「私が鳥に見えますか？だとしたら重症ですよ」

そいつは失礼にも俺のことを笑いながら言っただけだ。

「そりゃ重症に決まってる。俺はトラックにひかれたんだからな。それにしても頭と目がおかしくなったってのはショックだな」

「まあ、否定はしませんけどね」

こいつ、とことん失礼なやつだ。

「さて、自己紹介まだですね。とりあえず私の名前は桧山恵です。

でも名前は覚える必要ありませんのですぐに忘れていただいて結構です。年齢はちゃんと数えたら四十歳くらいになりますかね」

「四十？」

見た感じ中学生か高校生くらいにしか見えなかった俺は心底驚いた。

「そんなに驚かないで下さい。ちゃんと数えたらの話ですから」

俺には意味がわからなかった。

「どういうことだ？」

「実は私、二十五年くらい前に事故で死にましてね。当時ピチピチの十七歳。今の私もその頃のままでの姿です」

「死んだ？」

「はい、自己紹介の続きになりますが、私は高校生の頃に事故で死んじゃいましてね、それから運よくここで働かせてもらうことになりました。そんな感じで私は今ここで天使として働いてます。だから私は天使です。漫画とかで見たことありますよね？まあそんな感じでここは天国の門ってやつです。ここにくるのは死にかけの人で、その人が天国、地獄、もとの身体のいずれに行くかを決める場所です。理解できましたか？」

できるはずがない。なんなんだそのルールは？ていうかなんでこいつは楽しそうなんだ？

「不満そうな顔してますね」

「この場面で喜ぶやつの顔が見てみたいな」

「まあ、最初はみんなそうですよね」

最初はってどういうことだよ……。俺はぐるっと辺りを見回した。目の前の自称天使は、天使なんていうわりに見た目は羽以外普通。服もブーツカットのブルージーンズに白いシャツと、普通の私服にしか見えない。天国の門なんていうわりには楽しそうな雰囲気もなく、座っている地面も雲なんかではなくただの芝生。イメージと違いすぎている。

「そういえば、俺が死にかけてるっていうのは？」

たしか、俺は酔っていてトラックに轢かれたはずだ。死んでなかった

たのか？

「とりあえず、植物人間ってやつですね。だから、ここで生き返るか、死んで天国と地獄のどちらに行くかを決めるんです。わかりやすいでしょう？」

にこにこしながらそんなこと言われてもな。でも、それなら答えは決まっている。

「じゃあ、生き返らせてくれ。俺は自分の身体に戻る」

「残念なんです、自分で選べるんじゃないんです。それができると都合が悪いんで」

どんな都合だよ、と自分の中でだけ毒づいた。

「じゃあ、どうすればいい？」

「それはとっても簡単なんです安心してください。単純な迷路です」
「……迷路？」

「はい、もしかしてやったことありませんか？」

「いや、なくはないけど」

「じゃあ問題ないですね。早速始めましょうか」

「いや、まっ……」

まてまてまて、どうも考えがまとまらない。人の生き死にを迷路で決めるっていうのか？混乱で頭も口もうまく動かない。そうやってあたふたしているうちに、天使はパタパタと飛んで行ってしまふ。仕方なく俺は追いかける。

「さあ、ここが入り口です」

天使が振り返ったとき、そこにはたくさんさんの扉が並んでいた。

「では説明します。さっきは迷路と言いましたが、実はちよつと勝手が違いまして、最初にここにある二六の扉から一つを選んでいただきます。この扉はすべて百階建てのエレベーターになっていて、どのフロアに行くこともできます。そこからあみだくじの要領で道があります。ですが、迷路なのであみだと違って曲がるかどうかを決められます」

「ちよつとよくわからないな」

そう言うのと、少し考え込むようにあごに手を当てた

「そうですね、じゃああみだくじだと思ってください。あみだくじは最初に入口を決めますよね？」

「そうだね」

「その入口がこのAとZの二六の扉です。そしてあみだくじが一〇〇種類あって、それが一〇〇のフロアです。そしてあるフロアで降ります。そこから普通の迷路だと思ってください。ちなみに、道はあみだくじの要領なので後ろに下がることはできません。行き止まりもないので、迷路といっても迷うことはありません。こんなもんでどうですか？」

なんとなくルールはわかってきたから頷いておく。

「それはわかった。出口はどうなってるんだ？」

「出口は入口と同じように二六ありまして、各フロアごとに振り分けは違っています。二六すべての出口が地獄というフロアもあります」

「なんだって？」

そんなバカな話があるのか？そのフロアを選んだら確実に地獄行きだなんて……。

「別にすべてのフロアがそうなってるわけじゃありませんから。とりあえず内訳を説明しますね。二六〇〇の出口のうち、地獄行きが一二〇〇本、天国行きが一二〇〇本、生き返りが一九九本、そして私のように天使になるのが一本です」

俺は愕然とした。泣けてくる話だ。

「生きて還れる確率って一割もないじゃんか」

「大丈夫ですよ。私なんてじゃんけんで十一回連続で勝つくらい難しい確率でしたから」

最悪だ。

「天使になるべくして生まれたっていうか死んだっていうか、やっぱ私って天使みたいにかわいいですからね」

最悪だ。なんで酒なんて飲んだんだろう？

「高校のときはエンジェル恵なんて名乗ったりして」

最悪だ。なんで飲み会なんかに出たんだ俺は。

「……………あの、恥ずかしいんでそろそろつつこんでもらえますか？せつかく元気付けようと頑張ってるんですから」

「ああ、悪かった」

落ち込んでいることに変わりはないが、そのままいても意味はないとりあえず意地でも生き返ってやる。確かに天使に再就職よりは楽な条件だしな。

「とりあえずもう大丈夫だ。案内してくれ、エンジェル恵」

「……………それ冗談ですからね。でも元気になってくれたならなによりです。では、A→Zから一つ選んでください。ここは別に重要じゃないんで気軽に選んでください。どれを選んでも出口が減るわけじゃないんで」

確かにどれを選んでも一緒だけど、端っこだと選べる幅が少なくなるな。

「じゃあ、Mにしてくれ」

選べたって出口に何があるかわからないのだから意味はない。それでも選べるほうが気分がいいと思ったから真ん中を選んだ。

「ではいきましょう」

しばらく歩いて、Mと書かれた扉の前に立った。天使がボソツと何かを呟いて、その扉は開いた。俺に向かってにこつと笑いかけて中に入るよう促す。中は意外と普通で、ボタンがない以外日常で使っているそれと変わりなかった。

「さあ、ここは重要ですよ。天使なるにはここで一〇〇分の一を通らなきゃですからね」

そんなことはどうでもいい。

「生き返る出口って、一番多いフロアでどのくらいあるんだ？」

「そうですね、多いフロアだと七つくらいだと思います。もちろん〇のフロアもあります」

……………七か。そこに行ければ確率は高そうだが。

「毎日神様の気まぐれで決まるので今日はすべて均一という可能性もあります。七つていうのは私が今までに見てきた平均になります」
「てことは、二六すべてが生き返りのフロアもあるかもしれないってことか？」

「ありえなくはないですね」

「そうか」

目を瞑り、ゆっくり呼吸する。これは本当に命がかかっているのだ。

「じゃあ、五〇階を……頼む」

「……はい。かしこまりました」

天使もすべてを理解したような穏やかな表情で頷いた。

「では、その扉を開いてください」

「え？」

エレベーターはまだ動いてもいないのにもう降りるのか？

「え？じゃないですよ。ここが五〇階です」

「いつ動いた？」

「今さっき動きました」

「……やっぱ現実とはかけ離れた世界らしい。実感はないけど、こいつが着いたというなら本当に着いたんだろう。」

「あのさ、このフロアにはいくつ生き返りの出口があるんだ？」

「……それは、お答えできません。そういう決まりなんです」

天使は言いづらそうに答えた。まあ仕方ないか。俺は一つ息を吐いて扉に手をかける。扉は拍子抜けするほどあっさり開いた。

「……なんだこれは？俺はその光景に驚いた。目の前にはただの一本道が続き、それをつくる壁にはエジプトの壁画のような意味のわからない絵が描かれている。明かりは乏しく薄暗さが不気味に感じられる。一步踏み出すのがためらわれた。」

「行きましょう。大丈夫です。簡単な迷路ですから」

少し不安になっていた俺は、その笑顔に救われた気がした。

。

「右にしますか？それとも真っ直ぐにしますか？」

これで八つ目の分かれ道。ここまで各分かれ道でかなり悩んできた。天使はそれをずっと黙って見守ってくれていた。後どれくらいあるんだろう？

「右に行こう」

「はい」

右に曲がれば突き当たりのＴ字路を左に曲がり、左に曲がれば突き当たりのＴ字路を右に曲がる。真っ直ぐ行けば次の分かれ道で悩むそれをひたすら繰り返し続けた。そして

「お疲れ様でした」

この迷路で見る初めての行き止まりがそこにあった。天使が振り返り、優しく笑った。

「ここが出口です。アルファベットで言うと、Hになりますね。少し左に来ました」

「・・・・・・天国の頭文字だな」

そんなことを呟いて、少し複雑な気持ちになった。

「ちなみに、地獄もHですよ」

「・・・・・・」

「まあ、開けてみなきゃわかりませんから、まだ落ち込まないで下さい」

「それもそうだな」

この扉を開いたとき、俺の生死が決まる。すごく緊張しそうなものだけど、意外と楽な気分だった。多分、こいつのおかげなんだろう。俺は天使に顔を向けた。

「えっと、桧山恵さん・・・・・・だっけ？ここまで本当にありがとう。君には助けられたよ」

少し恥ずかしいのを隠すように素っ気なく言った。

「いいえ、お仕事ですから。それに、私も楽しかったですし」

なぜだか少し気まずい空気が流れる。俺はたまらず口を開いた。

「じゃあ、そろそろ行くから。君も元気だな」

「はい、いつてらっしゃい」

エレベーターのときと同じように一息を吐いて扉に手をかける。

「扉の向こうが、あなたの望む世界でありますように。あなたの未来が、輝けるものでありますように」

背中にある暖かい手が当てられていた。

「天使さんのちょっとしたおまじないでした」

そいつは悪戯っぽく笑って言った。俺も思わず吹き出す。

「ありがとな」

一言残して扉を押し開いた。その瞬間に、俺はいつぱいの光に包まれた。

。

「あのさ、いくつか訊きたいことがあるんだけど、いいか？」

「どうぞ」

目の前でふわふわ浮いてる女の子は笑顔で答えた。

「君はだれ？」

「自己紹介が必要ですか？だとしたら重症ですよ」

「……いや、いい。別にもう一つ、訊きたいことがある」

「どうぞ」

「もう一回、迷路やるのか？」

「そうなりますが、今回は完全に死んでるので、出口は地獄が三〇〇本、天国が一二九本、天使になるのが一本の迷路になりますね」

「……こいつ、笑いながら言いやがって……
・もう嫌だ。

「それにしてもツイてないですね。せっかく生き返ったのに戻った場所が火葬場だなんて、前代未聞ですよ。迷路やつてる途中に死んでしまったんですね」

「……最悪だ。戻った瞬間熱かったし。」

「とりあえず確認しますが、今回は説明は要らないですよね?」

「ああ、こうなったら意地でも天使になってやるさ。背中に羽でもなんでもつけてやる」

「ふふつ。応援しますよ。では、行きましょう」

俺は再び迷路の中に身を投じた。

「ようこそ、天国の門へ。俺は天使だ。これから一緒に迷路をやらないかい?」

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0421f/>

Dead or Alive

2010年10月9日14時30分発行